

7月11日19時11分、待ちに待った朗報が、文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室長の浅井様より、綾町役場に電話で届けられました。電話は、パリにあるユネスコ本部のMAB国際調整理事会にて「先程、宮崎県綾地域がユネスコエコパークに登録されました」との内容です。日本では32年ぶり、条件が厳しくなつてからは初めての登録となります。

MABとは、1971年に発足した「人間と生物圏計画(Man and Biosphere Programme)」のことで、その中心とな

緑のエッセイ



昭和23年 宮崎県宮崎市青島生まれ
昭和45年 横浜国立大学卒業
昭和46年 宮崎県立高等学校生物教員に就職
平成19年 宮崎日々新聞社賞 科学賞受賞
平成20年 文部科学大臣 優秀教員表彰
宮崎県立高等学校生物教員定年退職
綾町照葉樹林文化推進専門監(嘱託)

る事業が「生物圏保存地域(Biosphere Reserve:BR)」で、日本では「ユネスコエコパーク」と呼ばれています。

ところで、私は約30年近く綾の照葉樹林保護や照葉樹林プロジェクト、ユネスコエコパーク登録申請等々に関わつて来ましたが、そのきつかけを問われれば「偶然の連鎖」としか言えません。一つは学生時代から全国の植生調査をしていた事が宮崎県内の調査をする事になり、綾の照葉樹林に関わることになりました。もう一つは植生調査が植物社会学的研究(ありのままの自然と人間の干渉(歴史・文

化・経済活動等の視点)を受けた自然まで考察)だったことが、当時の郷田實前綾町長の「照葉樹林は日本文化の原点」とした地域づくりに共鳴でき、従来の森林の価値・評価・人間との関係等を根本から考え直す絶好の機会と思つたからです。具体的に関わり始めたのは1985年の「照葉樹林文化を考えるシンポジウム」の事務局長になつてからです。当時、雑木山が「日本文化の原点」とか、「自らの自然観や感性、身につけている諸々の生活・文化要素と深く結びつく自然」とか言つても殆ど理解されない中で、自然・民俗・歴

史・哲学・文学(短歌等)・芸術(歌・絵画・クラフト等々)を盛り込んだ連続5回の開催は、森林に対する見方・考え方を大きく変え、綾町の1966年からの取組の先見性や正しさを世に発信する事になりました。

綾町の照葉樹林を核とした地域づくりが長いため、行政や地域づくりの研究者からは「新しい取組が欲しい」との意見をよく聞かされました。しかし、綾町はゆつくりではあります。世界自然遺産登録の運動を経て「綾の照葉樹林プロジェクト」へと展開していきま

す。プロジェクトは九州森林管理局・宮崎県・綾町・(公財)日本自然保護協会・NPO法人であるのは森の会の五者の協定で進められますが、私は学識経験者として一人だけ個人として参加し、林野庁の保護林関係の各種検討委員会の委員等としても関わっています。これらの経験を礎に、私は(公財)日本自然保護協会の協力のもと、ユネスコエコパーク登録申請書をまとめることとなります。またエコパーク登録決定を受け、「綾の照葉樹林プロジェクト」と「自然生態系農業を核とした各種の取組」を両輪とし、産学官を加えた緊密な連携組織や運営システムづくりも進めてい

ます。しかし、117ヶ国、598地域とBRネットでは結ばれ、世界とリアルタイムでの情報交換や、将来予想される人的交流等に対応出来る体制づくりなどの課題も多く残されています。

「綾の照葉樹林プロジェクト」は森林の持つ多面的機能を科学的に検証しながら照葉樹林の復元を目指しつつ、持続可能な利活用(Wise use)も考える、長期にわたる取り組みです。こうした取組が何世代にも渡つてしっかりと発展的に引き継がれるように、皆さんと共に努力していきたいと思ひます。